第２章　柏木城跡の位置と環境

第１節　地 理 的 環 境

本遺跡が位置する北塩原村は福島県の北西部に位置し、東・南は猪苗代町、西は喜多方市、北は山形県米沢市に接する。村域は233.94㎢で、その約80％を山林が占め、なかでも風光明媚な裏磐梯は観光地として著名である。裏磐梯の桧原湖や五色沼など湖沼を主とする景観は、明治21（1888）年の磐梯山の噴火によって吾妻川・大川入川・小野川などがせき止められ、大小さまざまな湖沼ができたことによる。

北塩原村の地質については、『北塩原村史　資料編』に詳しい。本遺跡が属する地域は猫魔山の噴火による安山岩溶岩を主とする地層である。柏木城跡にも、噴火による噴出物と思われる礫を多数確認している。

第２節　歴 史 的 環 境

北塩原村は旧石器時代から近代まで、数多くの遺跡が確認できる。桧原・裏磐梯地区は、前述の明治21年の噴火によってそのほとんどが湖底となった。このため、古代以前の人々の生活のあとが確認できるのは大塩川沿いの大塩地区や、会津盆地を望む北山地区が多い。

旧石器時代の可能性がある遺物が採取された小野川Ｂ遺跡は、現在小野川湖の湖底にあり、詳細は不明である。

村で多く確認されているのは縄文時代の遺跡である。縄文時代早期の一盃清水・二十平下・上二ノ沢遺跡をはじめとして、前期の天ケ作・松音寺・二十平遺跡、中期・後期の松音寺・土合坂ノ上・与市ケ窪遺跡、晩期の土合矢ノ根塚遺跡がある。遺跡の分布は大塩・北山地区など広範囲に及ぶ。とくに北山地区の松音寺遺跡は前期から後期まで続く遺跡で、調査例こそないものの表採された遺物量から中心的な遺跡と考えられている。

弥生・古墳時代の遺跡は現状では確認されていない。ついで人々の痕跡が確認できるのは古代である。入大光寺窯跡では平成２・６年に試掘調査が行われ、８世紀の須恵器窯が４基、確認された。この窯で焼成された須恵器等は耶麻郡内のみで出土例が確認されているため、製品の流通範囲は狭かったものと推察されている。

当村で再び遺跡数が増加するのは中世になってからである。遺跡の種類は現在、館跡・山城を中心としており集落跡は確認されていないが、館や山城に関連する集落も当然存在したであろう。北山地区には中世からのものと思われる小字名が散見される（「第三章第六節」『北塩原村史　通史編』）。

本書に収録されている柏木城跡を含む綱取城跡・戸山城跡・桧原（小谷山）城跡は、米沢街道沿いにおける伊達氏と蘆名氏の攻防に伴って築城されたとされる山城で、いわゆる「境目の城」としての機能が考えられている。このうち、本書で取り上げる柏木城跡は石積み遺構が特徴的な城跡である。本書に詳説されているように、その石積み造成の技術系譜や同時期と考えられている蘆名領・伊達領に位置する山城との比較は、今後の調査により明らかにされることであろう。

この時期は板碑を初めとした宗教的な石像物も多い。「下吉の板碑」は阿弥陀三尊の種子が刻まれ、応永３年（1396）の紀年銘がある。「漆の四方仏」と通称される漆の石造物群は、刻書の確認されて

いないものが１基あるが、阿弥陀三尊種子がすべて蓮台に乗るものが２基あり、うち１基は応永２年（1395）の銘がある。この２基は頂部が山形に成形され、応永２年銘のものは頂部との間に段を有するなど、関東系の様相も見られる。

このほかに特筆すべき遺跡として、桧原（小谷山）城跡と戸山城跡に挟まれた山に、「桧原金銀山跡」がある。この鉱山は近代まで操業されていた。

この鉱山については、近世後半の文献であるが、『新編会津風土記』・『家世実紀』などにも記載がある。今後、この鉱山本体だけではなく、桧原（小谷山）城跡・戸山城跡との関係、鉱山にかかわった人々の生活跡、鉱山臼など関連の道具を製作していた石切場・加工場の存在も予想されよう。

近世は桧原宿場跡や桧原口番所跡などが確認される。

明治21年の噴火によって桧原宿場は現在桧原湖底にある。桧原五輪塔群は中世にこのあたりを治めていた穴沢氏の供養塔と伝わるが、一部に後刻の文も確認されており、銘文の内容とともに五輪塔の型式編年からの確認も必要となろう。

近代には北山発電所という、会津で初の水力発電所が明治34（1901）年に北山地区に作られた。

現在の北塩原村が誕生したのは、昭和29（1954）年に北山村・大塩村・桧原村が合併したことによる。

遺跡名	所在地	時期	遺跡番号
柏木城跡	北塩原村大塩字柏木城	中世	21
桧原峠の境塚	北塩原村桧原字西吾妻国有林	近世	1
鷹の巣一里塚	北塩原村桧原字西吾妻国有林	近世	2
桧原口留番所跡	北塩原村桧原字西吾妻国有林	近世	3
桧原金山精錬所跡	北塩原村桧原字小屋沢	近世	6
戸山城跡	北塩原村桧原字西吾妻国有林	中世	4
桧原金銀山跡	北塩原村桧原字芋畑沢・無縁原・五十両原	中世～近代	5
小谷山城跡	北塩原村桧原字西吾妻国有林	中世	7
戸倉澤大正寺跡	北塩原村桧原字早稲澤	近世	8
桧原宿場跡	北塩原村桧原字桧原(桧原湖底)	中世～近代	9
桧原五輪塔群	北塩原村桧原字高平山	中世	11
桧原山神社の燈篭	北塩原村桧原字巣の山	近世	12
巌山城跡	北塩原村桧原字細野山国有林	中世	10
吾妻山白鳳寺跡	北塩原村桧原字秋元原(秋元湖底)	中世	13
小野川Ａ遺跡	北塩原村桧原字小野川	縄文	44
小野川Ｂ遺跡	北塩原村桧原字小野川	旧石器	52
鹿垣柵跡	北塩原村大塩字萱峠	中世	14
小森山新田跡	北塩原村大塩字小森山	近世	19
桜峠遺跡	北塩原村大塩字桜峠	縄文	53
八丁壇の一里塚	北塩原村大塩字西小沢	近世	15
中島館跡	北塩原村大塩字中島道北	中世	18
西福寺跡	北塩原村大塩字湯ノ上	中世	17
大窪の塩井跡	北塩原村大塩字湯ノ上	古代	16
雨沼遺跡	北塩原村大塩字雨沼	縄文	43
六郎屋敷跡	北塩原村大塩字上六郎屋敷	中世	20
下高山遺跡	北塩原村大塩字下高山	古墳・近世	45
赤城館跡	北塩原村大塩字土合	中世	22
大窪の稗田	北塩原村大塩字稗田	縄文	24
道貞邸跡	北塩原村大塩字舘上	中世	23
二十平下遺跡	北塩原村大塩字二十平	縄文	54
上二ノ沢遺跡	北塩原村大塩字上二ノ沢	縄文・弥生・古代	56
作道遺跡	北塩原村大塩字作道	縄文	
屋敷遺跡	北塩原村大塩字屋敷	縄文	
長峯Ａ遺跡	北塩原村関屋字長峯下	縄文	55
長峯Ｂ遺跡	北塩原村関屋字長峯下	縄文	55
坪家館跡	北塩原村関屋字坪家舘	中世	25
一盃清水遺跡	北塩原村関屋字一盃清水	縄文	58
休場遺跡	北塩原村関屋字休場	縄文	57
樟前山遺跡	北塩原村関屋字前山	縄文	27
樟の一里塚	北塩原村関屋字一里壇ノ上	近世	26
興市ケ窪遺跡	北塩原村関屋字興市ヶ窪	縄文	28
土合矢ノ根遺跡	北塩原村関屋字土合	縄文	
綱取城跡	北塩原村北山字要害	中世	29
北山発電所	北塩原村北山字岩下	近代	30
矢ノ根塚遺跡	北塩原村北山字土合	縄文	31
坂ノ上遺跡	北塩原村関屋字坂ノ上	縄文	32
居館跡	北塩原村北山字上ノ台	中世	33
上ノ台館跡	北塩原村北山字上ノ台	中世	34
漆の石仏群	北塩原村北山字柿木田・原口・中在家	中世	35
下吉塚	北塩原村北山字下吉	中世	60
鶏林塚	北塩原村北山字鶏林	中世・近世	59
赤館跡	北塩原村北山字北畑	中世	36
松音寺遺跡	北塩原村北山字北畑	縄文	39
新井館跡	北塩原村北山字新井舘	中世	40
窪の薬師跡	北塩原村北山字村北	近世	38
下吉の板碑	北塩原村下吉字前畑	中世	41
入大光寺窯跡	北塩原村下吉字入大光寺	古代	37
天ケ作遺跡	北塩原村下吉字天ケ作	縄文	61
一盃館跡	北塩原村下吉字一盃舘	中世	42

図2-1　北塩原村位置図

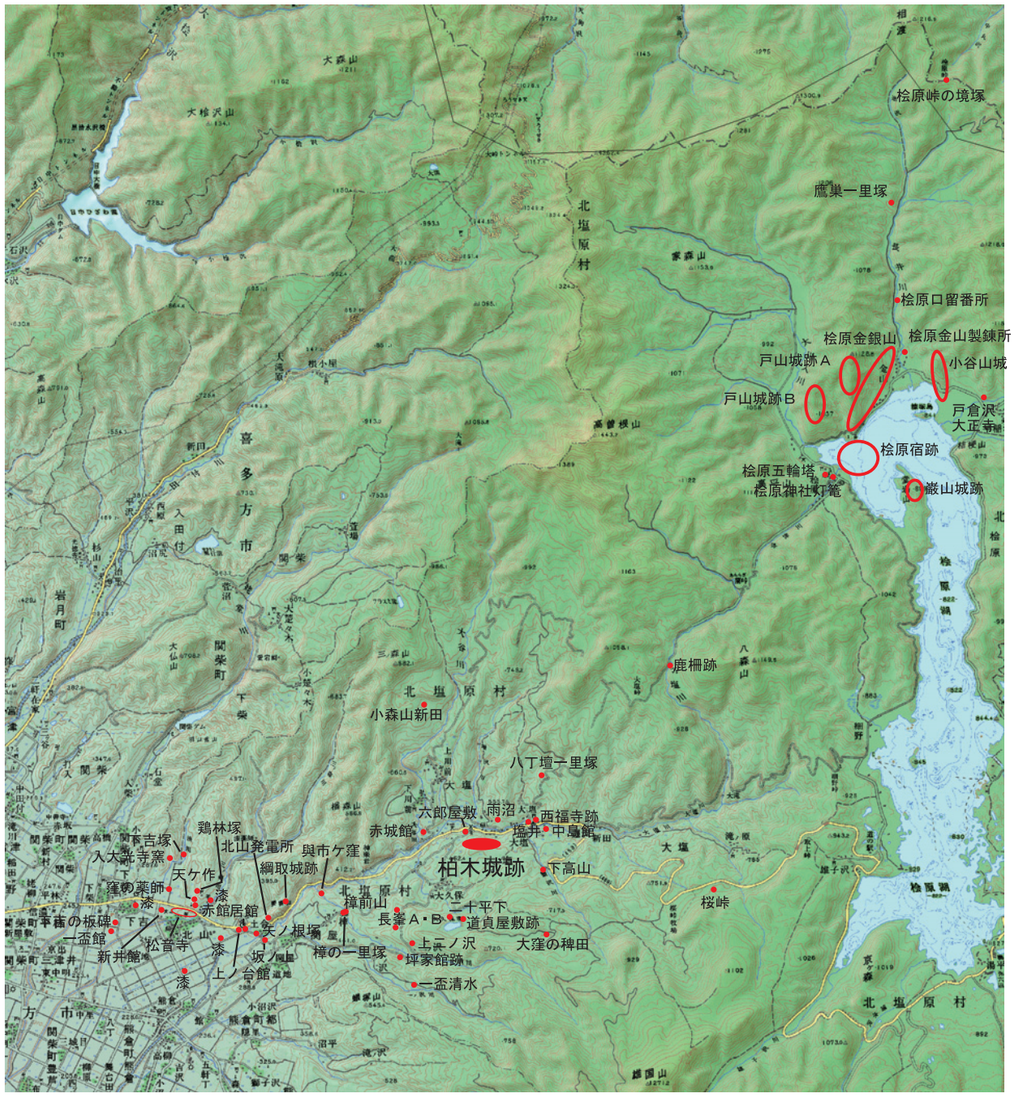

図2-2　遺跡位置図（国土地理院２万５千分の１　KASHMIR3Dで作成）

第３節　柏木城跡周辺の動物

１　地理的要因による動物分布

柏木城は会津盆地の北東端にある大塩川扇状地より東へ3ｋｍ上流に位置する。南側には標高1,300ｍの雄国山、北側には標高1,400ｍの高曽根山、東側には標高1,000ｍの八森連山が隣接しており、各山の境界を分断するように東西に流れる大塩川渓谷沿いの南側にある標高400～500ｍの小山に柏木城は展開している。

この山間は鳥類にとっては生息も移動もし易い適地となっているが、哺乳動物にとっては大塩川渓谷が妨げとなり多くの種が南北に分かれていると考えられる。

２　動物の生息状況

動物の調査は目視と聞き取りに加え、近隣地域の資料からの考察によるものである。

⑴　哺乳動物

・ツキノワグマ　周囲の全山に生息するが高曽根山から下りてくるものが多く見受けられる。
・カモシカ　　全山に生息。柏木城周辺でも頻繁に出没。郭内や土塁上でも足跡を確認。
・エゾシカ　　生息しない。雄国山麓の桜峠で一度だけ確認されているが以後は目撃なし。
・イノシシ　　生息しない。数回の目撃情報があるが低地から迷ってきたものと推測される。
・ニホンザル　　高曽根山系には生息。出没は少ない。
・テン　　生息する。城内の倒木上や石上で糞を確認。
・アナグマ、リス　　多数生息する。特に柏木城にはナラ、クルミの木が多い為、リスの営巣となっている。
・ノウサギ、キツネ、タヌキ　　全域に生息する。
・コウモリ、ネズミ、モグラ　　生息するが種別は不明。
・ムササビ、イタチ、ハクビシン　　未確認だが生息が予想される。

⑵　鳥　　類

高山に抱かれた広がりのある渓谷地形の為、大型の猛禽類から小型の鳥類まで種類は多いが柏木城周辺には湖沼が殆ど無いので水鳥は少ない。聞き取り調査ではトビ、カラス、スズメ、ツバメ、ウグイスといった他所でも見かけ易い回答となったがトビ、及びスズメについては同大の鳥類との誤認の可能性が含まれるかも知れない。

また、夏季にはフクロウの鳴き声が頻繁に聴こえるとの情報もあった。谷合で響くので場所の詳細は不明。

2011年、春に委員で現地調査した際に主郭付近の杉の樹上に猛禽類がいたが、鳴き声からノスリが巣を守るために威嚇していたものと推測される。猛禽類の巣は補修、拡大しながら何年にも渡って使用されるので保護の必要もあると判断される。

生息する鳥類は留鳥（通年いる鳥）、漂鳥（国内、又は低地、高地を移動する鳥）、渡り鳥（日本と外国を行き来する鳥）毎に分け、以下にまとめてみた。

３　柏木城跡周辺生息鳥類分類

・留鳥　スズメ、シジュウカラ、キジバト、ハシボソガラス、ハシブトガラス、フクロウ、トビ、ホオジロ、キジ、コゲラ、アカゲラ、アオゲラ、カワガラス、カワウ、アオサギ、カルガモ、カワセミ、ヤマドリ、ゴジュウカラ
・漂鳥　ウグイス、ヒヨドリ、モズ、ノスリ、ヒバリ、メジロ、ムクドリ、ホオアカ、トラツグミ、アオジ、カケス、ミソサザイ、ヒガラ、キセキレイ、ハクセキレイ
・渡り鳥　ツバメ、イワツバメ、オオルリ、キビタキ、カッコウ、ヨタカ、ヨシキリ、ツツドリ、ジュウイチ、ホトトギス、ヤブサメ、ツグミ、マガモ、サシバ

その他の鳥類で生息が推測される種も数多くあるが未確認である事に加え、移動の途中や迷鳥の可能性も高いので確実性のある種のみの記載に留めたい。

（木村郁夫）

参考文献
会津民俗研究会1977『北塩原の民俗』　北塩原村
冨田國男1994『裏磐梯自然ハンドブック』
磐梯山噴火記念館編1988『磐梯山の自然』　磐梯山噴火記念館
高山の原生林を守る会編1994『吾妻連峰』
阿部　武2009『裏磐梯の生物』
高野伸二1989『日本の野鳥』山と渓谷社
杉坂　学2004『野鳥観察図鑑』成美堂出版
小林桂助1988『野山の鳥』保育社
伊達郡梁川町1993『梁川町史』第四巻

図2-2　ニホンカモシカ
平成25年12月9日、柏木城跡の大石塁にて撮影。

第４節　柏木城跡と周辺の地形について

⑴　位置、所在地
北塩原村大字大塩字柏木城2450。主郭は、大塩集落の中心部より南南西に集落と平行に位置する。距離は300m。

⑵　主郭の旧街道からの標高差
曲輪1：61m。曲輪2：56m。曲輪3：49m。曲輪4：50m。

⑶　帯曲輪の北側の斜面の斜度は緩やかな斜面で35度、外は40度で斜面を攻め上がることは不可能である。

⑷　水路
城の南側は水路（湿田）で20～30m。さらにその南側は50m位深い泥の湿田で、攻め入るのは難しい。東側には湿田が100mは続く。地の利を得た城で難攻不落の城である。

⑸　柏木城への道路
大久保集落より俗称滋里道、標高差31m、距離は500m、城の南側の馬場を通り、大塩長泉寺を通り大塩中心部に出る。旧米沢道からは大手口より上る道と城の西側を廻り搦手口へ登る道がある。

桧原からの道路は旧米沢街道の外に桧原より猪苗代に出る道、雄子沢より取上峠を通り、滝ノ原を通り大塩におりる道がある。取上峠より滝ノ原の上部で分かれて大久保館上に来る道があるが、細い山道で軍勢が通るには適さない。が、防備を備える必要はあると考えられる。

⑹　用水路

南側の水路（湿地）用の水を引くため、1.3kmの用水堀を作った。水源は通称、通り清水と呼んでいる雄国山の伏流水であり大量に湧出する。

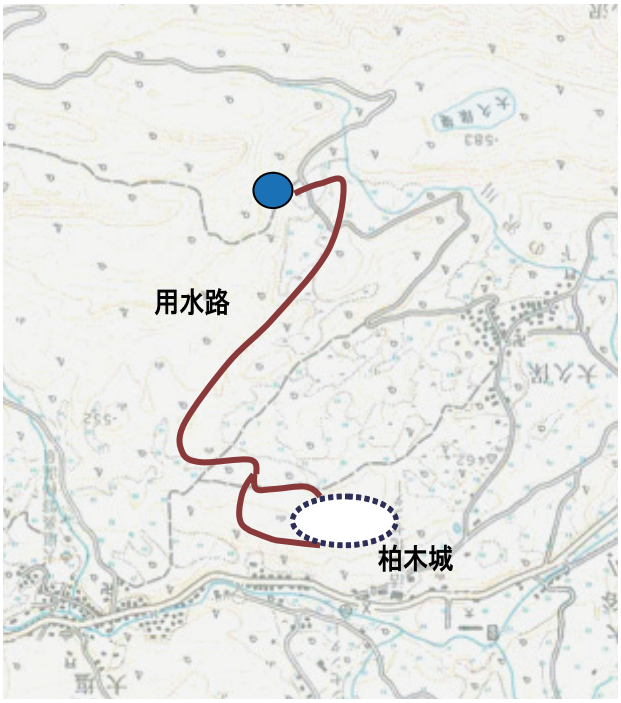

図2-3　推定される用水路
約1.3km離れた水源から引かれた水路が現在まで残る。
（国土地理院2万5000分の1地形図より作成）

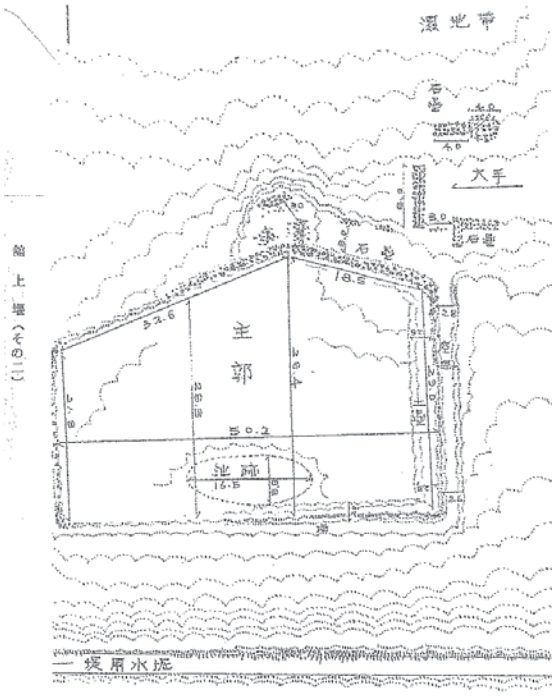

図2-4　道貞邸跡
水源近くには道貞邸跡という中世の遺跡があるとされる。
図は[渡部新一1987]より。

⑺　桧原側よりの大塩村への入り口は塩ノ沢のＶ字谷の沢に沿った狭い道で神社側より石落しなどの攻撃を受ければ防ぎようがない。

⑻　大塩川

大塩村の入口は大塩川につき当たる。湯の上橋を落とされると村に入るのは困難である。

（五十嵐　怜）